

被災地に希望をひろげよう

青年ボランティア ニュース

第9号 2011/5/8

民青同盟・青年ボラ
ンティアセンター

TEL0191-31-8036

被災地と心ひとつに、全国の仲間とともに復興へ

センターを閉じるにあたって

全国青年ボランティアセンター事務局長 岡 佑輔

全国青年ボランティアセンターでは、被災地の生活再建への歩みの支えになればと全国から青年がつどい、4月27日からボランティア活動をおこなってきました。5月8日までの11日間で、のべ550人もの青年が駆けつけました。一関市にセンターをおいて陸前高田市を中心にスタートし、宮城県や福島県にも支所をひらき、活動を広げてきました。

私たちが初めて被災地に入ったとき、あまりの被害を目の当たりにし、「ボランティアに何かできることはあるのか？」との思いになりました。ただ、そのなかで、被災者のみなさんから「浜の掃除をしてもらえると漁業の再開にむけて助かる」「泥に流された食器を洗う所まで手が回らない」「波にさらわれた漁具を探せば、生活再建への一歩がふみだせる」というお話をうかがい、「少しでもそのお手伝いになれば」とボランティア活動をはじめました。

最初は4人での作業でしたが、日を重ねるごとに広がり、最大で一日130人が行動しました。陸前高田市の広田半島の21か所で、漁具の片付け、漁港の整理、田んぼや畑に流入した資材などの清掃、小学校の窓ふき、個人宅の清掃、食器の泥を洗う作業、側溝の泥さらいなど様々な作業をしてきました。

初日は、広田小学校で、救援物資として届いたお花を花壇に植えました。「今年は桜を見てもと悲しくなったけど、若い人が植えてくれた花は、きっとみんなの心を温かくすると思うよ」と声をかけられたことが、何よりの励みになりました。また、漁港に流されてきたモノを片付けていたとき、「青年がくるから」と「あの日」以来はじめて浜に降りてこられた女性が、涙ながらに話してくれました。青年が力をあわせている姿をみて自分も頑張ってみよう、と話されました。私たちは、被災者のみなさんの苦悩をどう受けとめて言葉を返せばいいのか分からず、戸惑うこともあ

りましたが、同時に、たくさんの温かい言葉もいただきました。深い悲しみとともに、少しでも希望をはぐくみ復興の力になれば、とみんなで交流しながらの活動でした。

8日をもって、全国青年ボランティアセンターとしての被災地への直接支援は一区切りとしますが、参加者から「これからも被災地に元気を与えられるように地元に戻っても頑張りたい」「帰ったら被災地の願いを政府に届けたい。これから住民の思いが実る復興をしていくためにはどうしたらいいのか考えていかないといけないと思った。それが自分の責任」「今後の生活再建を被災地と一緒に考えたいと思った」などの決意が、口々に語られています。これからも、避難生活への支援強化とともに、今後の仕事や生活再建に向けたとりくみ、学生・高校生の学費や勉強の不安にこたえる活動など、支援の充実・発展が必要です。全国から駆けつけた青年ボランティアが、こんどはそれぞれの地域でさらに仲間をひろげ、被災地と心ひとつに復興をめざし、政治や社会を動かすために頑張りたいと思います。

決して長くはない期間でしたが、青年が力を合わせれば出来ることはいっぱいあると感じました。「明日も是非手伝ってください」、「うちも手伝ってほしいことがある」と被災者のみなさんから信頼をよせていただき、次々に声をかけていただけたことは、大変うれしく、誇らしく思います。

これからも被災地で暮らす皆さんと全国の青年が力をあわせて、希望をもって前へ進んでいこうと思える復興と社会をつくるために全力をつくします。

陸前高田のみなさま、短い期間でしたが、ありがとうございました。